



中部のエネルギーを築いた人々

木曾谷の夜明け ~その1~ 長野県福島電気株式会社の創立者・川合勘助

長野県歌・「信濃の国」の2番に
 「四方に聳ゆる山々は 御嶽 乗鞍 駒ヶ岳
 浅間は殊に活火山 いずれも国の鎮めなり
 流れ淀まずゆく水は 北に犀川 千曲川
 南に木曾川 天竜川 これまた国の固めなり」

と歌われているように、長野県は、山高く水資源に恵まれ、水力発電所を造るのに適している。

長野県の各地で電灯事業を開始したのは資料1「創業期における長野県内の電灯事業」のとおりである。

福島電気株式会社は、1909(明治39)年、木曾福島町周辺に電灯を供給する目的で設立された。その後、中山道の主要地点で、中央線鉄道の全線開通に向け活気づく木曾福島町周辺を中心に、資料2「木曾谷の発電所」のように小規模な水力発電所を建設し電気事業を発展させていった。



川合勘助
(出典：大同製鋼50年史)

資料1 創業期における長野県内の電気事業一覧

	発電所名	出力	開業年月日
長野電灯	茂 营	60kW	明治31年 5 月11日
松本電灯	薄川第一	60kW	明治32年12月13日
飯田電灯	松川第一	75kW	明治33年 1 月22日
諏訪電灯	落 合	100kW	明治34年 1 月29日
上田電灯	畑 山	60kW	明治35年 8 月11日
信濃電気	米 子	60kW	明治36年12月29日
安曇電灯	宮城第一	360kW	明治37年 9 月14日
福島電気	杭 の 原	50kW	明治40年10月29日

資料2 木曾谷の発電所

発電所名(所在地)	出力	落差	水 車	発電機	竣 工 年
杭の原発電所 (新開村杭の原)	80kW	31m	373kW X 1 電業社製	375kW X 1 芝浦製	1910(明治40)50kWで新設
					1929(昭和4)300kWに増設
					1945(昭和20)休止
新開発電所 (新開村字出尻)	1,200kW	27m	1,641kW X 1 奥村製	1,500kW X 1 奥村製	1919(大正8)新設
					1929(昭和4) 変圧器150kW X 3 設置
奈川発電所 (奈川村小山)	18kW	27m	24kW X 1 荏原製	25kW X 1 明治電機製	1923(大正12)新設 1946(昭和21)休止
日義発電所 (日義村字箱淵)	1,200kW	27.3m	1,343kW X 1 電業社製	1,500kW X 1 芝浦製	1937(昭和12)新設 1950(昭和25) 直配変圧器200kW X 4 設置
城山発電所 (福島町三軒)	1,350kW	19.9m	1,500kW X 1 電業社製	1,750kW X 1 芝浦製	1938(昭和13)新設

その後、山間地の木曾福島町に福島電気—電気製鋼所—木曾川電力から中部電力に至る電気事業と電気製鋼所の木曾福島工場建設から大同製鋼—大同特殊鋼に至る経緯を

- (1) 長野県、福島電気株式会社の創設者・川合勘助(写真)
- (2) 木曾谷の実業家・小野秀一
- (3) 木曾川電力株を振出に名古屋経済界、東邦学園を創立し、初代理事長として教育界で活躍した下出義雄等を順次紹介する。

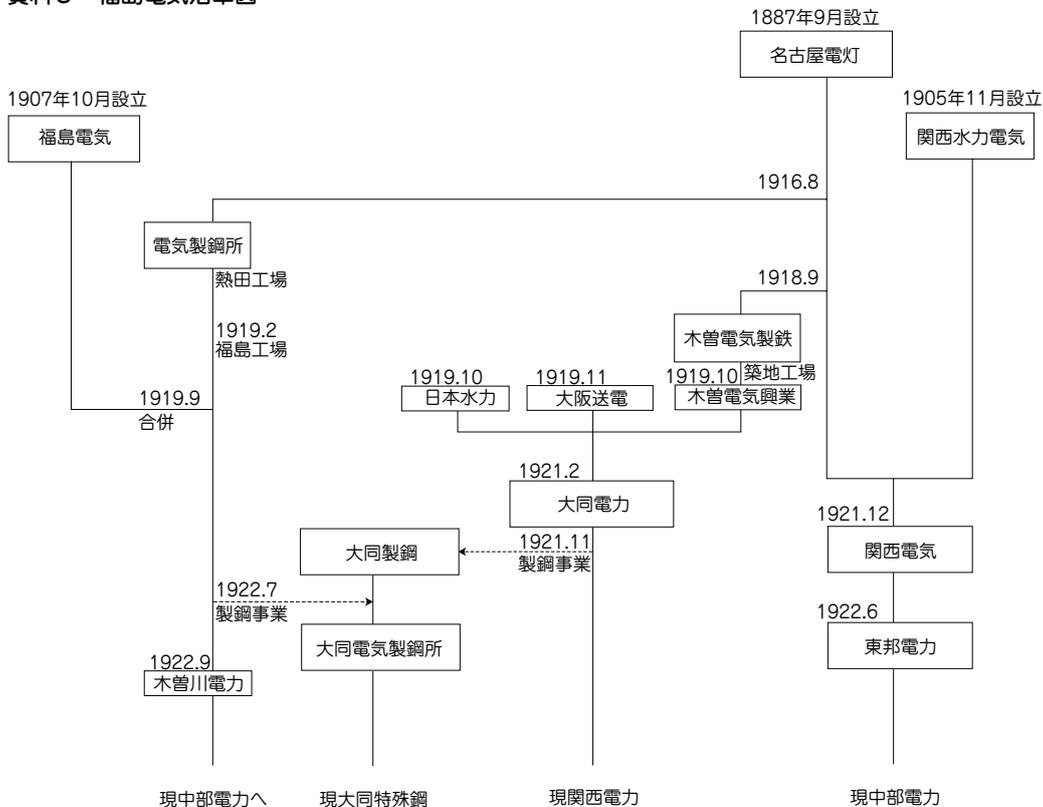
福島電気株式会社の設立

長野県木曾福島町周辺に電気の灯がついたのは1909(明治42)年である。

1906(明治39)年、地元の有力者である川合勘助、小野秀一等が発起人となり、木曾福島町並びにその周辺集落に電灯を供給する目的で福島電気株式会社(資本金：5,000円)が設立され、新開村杭の原の黒川右岸に水力発電

電の経験を持つ大岡正に委託し、杭の原発電所を1908(明治41)年に建設した。当時の主な需要家は木曾山林学校寄宿舎、地元の芦屋と岩屋旅館、信西社製糸場などであった。そして木曾福島町新開地区の水利権取得を申請した。川合勘助は、酒造業を営む資産家で、1892(明治25)年から木曾福島町会議員を務

資料3 福島電気沿革図



め木曾谷の発展に尽くした功績は大きい。

一方、福沢桃介率いる名古屋電灯は木曾川水系の電源開発のため水利権獲得を目指していた。また、木曾谷からマンガン鉱石、珪石、石灰石などの鉱物が産出しており、福沢桃介は新開地区に発電所の建設と木曾福島町にフェロアロイの専門工場とを建設する構想を持つに至った。

当時、福島電気の社長であった川合勘助は、水利権を名古屋電灯に譲渡する代償として、地元開発のため工場を建設するよう懇願した。このように名古屋電灯は水利権獲得、名古屋電灯の関係会社である電気製鋼所はフェロアロイの生産など両社の構想が一致したのである。

1919(大正8)年、名古屋電灯から分離独立した(株)電気製鋼所が木曾福島工場を建設し、同年、福島電気(株)と合併した。この時、川合は電気製鋼所の取締役、小野秀一は支配人(木曾福島営業所長)に就任した。さらに1921(大正10)年、大同製鋼(株)が大同電力(株)から分離独立し設立され、翌年、電気製鋼所は大同製鋼に熱田、木曾福島両工場を現物出資して、製鉄部門を切り離し、商号を木曾川電力(株)と変更した。

(資料3：福島電気沿革図—浅野伸一の論文「木曾川の水力開発と電気製鉄製鋼事業」から参考に抜粋)

鳥居電力株式会社の設立

1912(大正元)年、鳥居電力(資本金：2万円)が、岡田嘉惣太・湯川九郎右衛門・湯川治右衛門・篠原武兵衛や地元奈良井の平野隆策・原徹・伊原岩吉・中村歌次郎らにより設立され、事務所を敷原に置いた。これは当時の鉄道院が中央線鳥居トンネルの掘削工事用として、奈良井川に設置した水力発電所を払い下げ、地元に送電したものである。

また、「敷原駅沿革」によれば、従来駅の照明設備はランプを使用していたが、1917(大正6)年、16燭光22個、10燭光3個を奈良井発電所と契約、さらに翌年、木曾川電力株式会社と合併したため、各種信号機8本へ16燭光、南北へ100燭光各1個及び16燭光各3個宛契約を更改したと記述され、駅舎照明設備の歴史を知る上で興味深いものである。

黒川水力(=吉田水力株式会社)の設立

新開村の黒川地区ではランプ生活を送っていたので、地元の田中兼松らが1920(大正9)年頃から発電を始め、1925(大正14)年、片原角太郎らにより黒川水力(株)が設立され、吉田地籍(現：黒川小学校裏付近)に黒川水力発電所を建設した。

この発電所は、木曾川水系黒川の水を約400m導水し、当初直流3kWの発電機により地元7戸を対象に業務を開始した。その後、

交流15kW発電機に増強し、黒川地区160戸、公共施設(学校、集会所、街灯などは無償供給)等に供給した。さらに地元ではもみすり機、こたつなどにも利用し、当時進歩的な電力活用として注目された。

その後、木曾川電力が開田村に供給拡大を図り、黒川地区を通過し、重複設備となることから、1929(昭和4)年、木曾川電力(株)と対等合併した。

また、合併後取り壊された水力発電機は上松町小川に特設された小川発電所に利用された。木工業の盛んな上松町では1914(大正

3)年頃から電灯が引かれ始め、翌年、電力による製材工場ができ、大正8年に小川水力電気株式会社が設立された。

奈川電灯株式会社の設立

1922(大正11)年6月、古畑繁太郎はじめ7名が発起人となり奈川電灯株が設立された。当時の奈川村村長齊藤縫喜が取締役社長に就任し、奈川発電所を建設し営業を開始した。

この発電所は、信濃川水系黒川から取水(落差9.7㍍)し、出力18kWを発電、水車は荏原製作所製24kW、発電機は明治電機製25kVAであった。また、発電機の稼働時間は夕方から朝までで、今のようにメーター制ではなく定額制であった。

発電所建設経緯について奈川村史の一部を要約すると、奈川電灯株式会社は1921(大正10)年7月5日に役場庁舎の一部を借り、事務所(3坪)を設置、早速事業に取りかかった。以来村民一同、陰に陽に会社を援助して工

事の進捗に努め、約200㍍の導水路の建設、貯水池となる岩山の掘削(約200立方㍍)、導水管の設置、発電機の据え付けなどが同時に行われ、予定された地点に電柱が建てられ電線が引かれた。その結果、逓信省の検査を経て、大正12年2月1日より点灯の運びに至りたりと述べられている。このことからいかに村民が電気を熱望し、村民あげて協力したかが分かる。

1935(昭和10)年、電気器具やモーター等が多く使われ需要が増加したので、木曾川電力株に譲渡し、廃業した。なお、斎藤元村長の簡単な略歴は、次のとおりである。

(寺澤 安正)

齊藤縫喜(元奈川村村長)の略歴

1885	明治18	南安曇郡奈川村(黒川渡)にて生まれる
1906	明治39	長野県師範学校卒業 奈川村小学校長(訓導兼務)など15年間教育者として義務教育活動に貢献
1921	大正10	奈川村村長に就任(昭和16年まで19年間村長を務める)
1922	大正11	奈川電灯株式会社設立、取締役社長に就任
1941	昭和16	木曾福島町助役に就任
1943	昭和18	長野県議会議員に当選
1945	昭和20	木曾福島町長に就任
1965	昭和40	逝去